

宗麟とキリスト教

地中に眠るキリシタンの時代

編集 部

埋蔵文化財センターの講演会の最後は、後藤晃一氏による「考古学から見るキリシタン時代」というものでした。大分県におけるキリシタン遺跡については、田中裕介氏・神田高士氏の二人のお話と重複しますので割愛させていただきます。

私は、本日展示しています「キリシタンの遺物・遺跡」を中心に話をしようと思います。

一、発掘された島原の乱

第一のテーマは「発掘された島原の乱」です。

皆さまご存じのように、この島原の乱は、三代将軍徳川家光の時代、今から三八二年前の寛永十四年（一六三七）から寛永十五年（一六三八）にかけて、九州の天草、原

城を中心に発生した乱です。

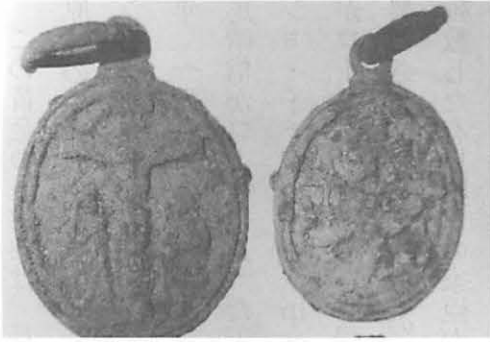
この戦いは、最近まで藩主松倉重政、勝家父子の苛政に反発した農民を中心とした篤い信仰心を持つ人々の一揆と考えられていましたが、最近では単なる一揆ではなく宗教的な叛乱であったと考えられるようになりました。確かに松倉父子による圧制や苛酷な弾圧などもあったと考えられますが、事件の発端がキリシタン農民による代官所襲撃であり、一三日間に及ぶ原城での戦闘、九州全土から鎮庄のために大動員がなされた事、原城に立て籠もった三万七千人全員が殺害されている事。平成の発掘により多くの十字架やメダイが発見されたことなどから宗教的な叛乱であった事が判ってきました。（原城での生存者は、旧有馬藩士で南蛮絵師の山田右衛門佐一名でした。）

平成四年（一九九二）からの原城発掘調査にて数多くの人骨が発掘されています。頭から足までの完全な遺骨が一体もないという事、総ての人骨に夥しい刀傷がある事等から、徹底的に殺戮破壊されたものと思われる。九州及び周辺から鎮庄の為動員された

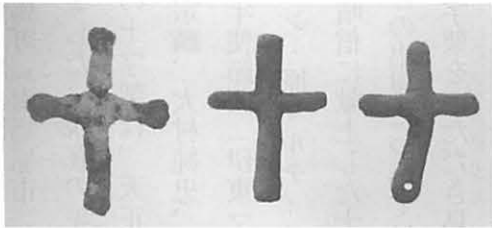
人々は十二万五千八百人の上っています。寛永十五年（一六三八）寅二月廿一日の幕府報告書には、手負都合六千九百六拾人、討死都合千百三拾人、惣都合八千九拾七人となっています。

また、この乱の一年半後の寛永十六年（一六三九）に幕府は第三次鎖国令を発し、ポルトガル人の来航を禁止しています。

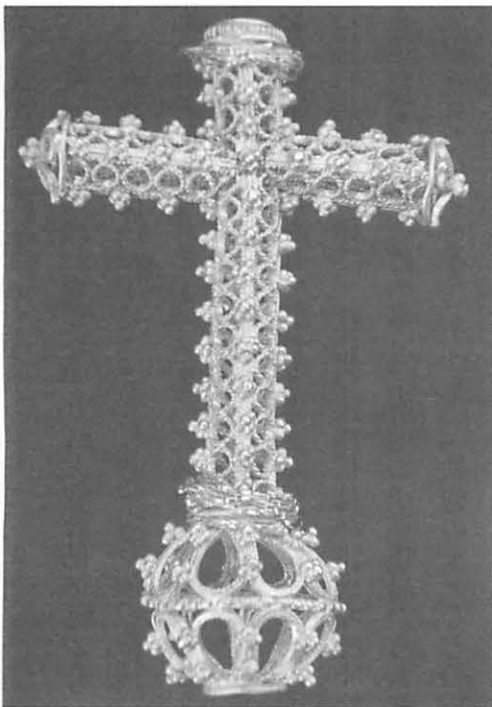
このように一段と強化された禁教令の下、人々はどのように信仰を深め続けて行ったのでしょうか。それは、今回展示しています「メダイ」「鉛製の十字架」



メダイ



鉛十字架



黄金の十字架

でその一部を見る事が出来ます。

メダイは現在の「メダル」と同じ様な物で、表裏に「キリスト像」「マリア像」「母子像」「十字架」「宣教師」などが彫られています。キリスト教遺物として数多く発見されています。「鉛十字架」は信仰の証として持っていたものです。天草では土中の中から鉛で作られた十字架が発見されています。鉛は当時の鉄砲の玉として使われたものです。鉛を溶かして型枠に入れ造ったものと考えられます。また、原城では下が丸い黄金の十字架も発見されています。

この黄金の十字架は、長崎市南有馬町（南島原市）の原城の本丸の畑の中より発見されました。現在のキリシタン関係の研究から、この黄金の十字架は、天正十年（一五八二）キリシタン大名大友宗麟、大村純忠、有馬晴信がローマに送った天正遣欧少年使節団（伊東マンショ・千々石ミゲル・中浦ジュリアン・原マルティノ）がローマ法王から戴き、帰国後有馬晴信に献上した十字架とされています。原城の畑の中からの出現については、殉教した有馬晴信の家臣が、この十字架をいただき島原の乱に参加、戦死したものと説明されています。

《天正遣欧少年使節》一五八二―一五九〇

・伊東マンショ……日向国伊東義祐の孫 義益

父は伊藤佑青 宗麟の名代

・千々石ミゲル……釜蓋城主 千々石紀員の子

大村純忠の甥有馬博信の従弟

・中浦ジュリアン……中浦城主 中浦甚五郎の子

肥前国西海市出身

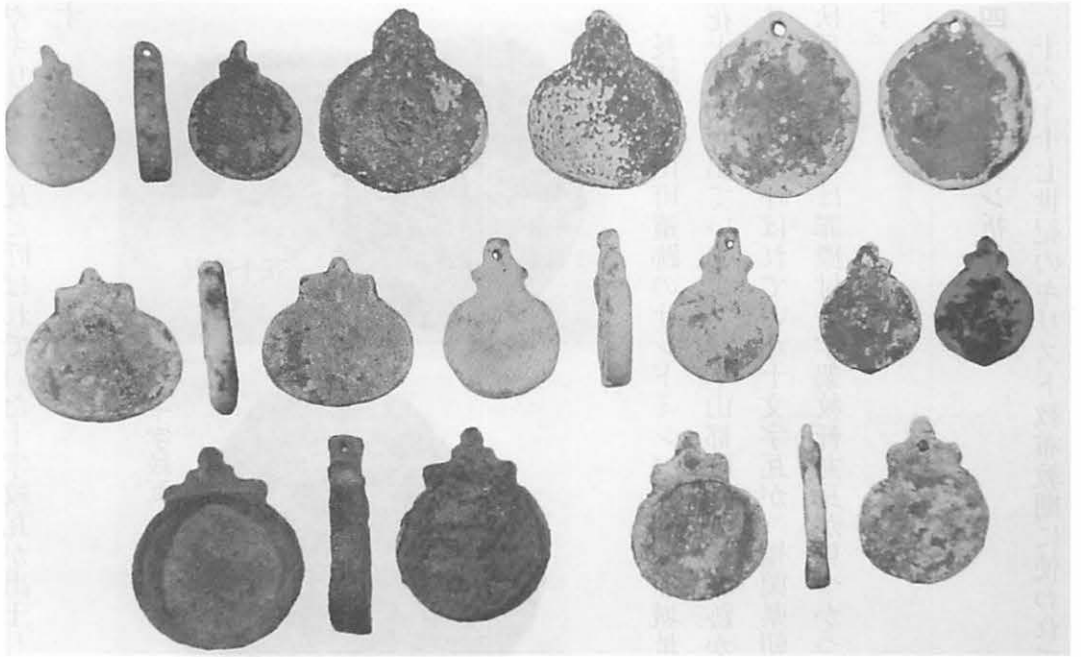
・原マルティノ……大村領名士原中務の子

長崎波佐見町出身

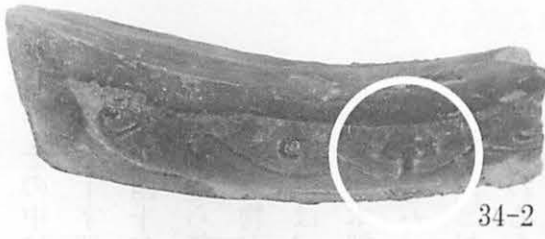
二、宣教師と武器

宣教師と大友氏とのつながりは、宣教師の話から「キリスト教の信仰の拡大と南蛮貿易による富の蓄積」であったと考えられます。各地の大名たちには信仰拡大の見返りとして貿易を行い戦いの武器となる鉄砲玉（鉛）を頂き軍事支援されていたと考えられています。外国から持ち込まれた鉛で、鉄砲の玉や信仰の証となる十字架を造っています。此の事は、府内の発掘現場から大量に発掘された「メダイ」「十字架」「鉄砲の玉」などの成分分析からも明確になっています。

府内の遺跡から発見された大量の「府内型メダイ」は成分分析の結果、九十%が鉛・錫で作られており、百パーセント鉛の物も発見されています。府内で作られたメダイの鉛は鉛同位体分析で、タイ国のソントー鉾山（タイ国カンチャナブリ県Ⅱバンコクの北西二五〇km）からの物と判明しました。宣教師の手で又は大友氏の貿易船が大量に持ち込んだと言えます。ソントー鉾山の方からメダイのインゴットもたくさん発見されています。府内でもこのメダイを作成していたようでインゴットの型枠が発見されています。



タイ国ソントー鉾山産の鉛で作った府内メダイ



三、教会跡と十字紋瓦

教会については、宣教師の記録や絵図から、当時の日本に多数存在している事が判明しています。しかし、発掘調査によって実際に発掘された数は少ないのです。同志社大学の森先生が「南蛮寺関連建物の礎石があるので」と考え、府内の発掘を行い、南蛮寺跡から礎石跡や硯片など発見されています。

毛利秀包が城主として入部した久留米城前の両替所付近からは十字紋瓦や沢潟紋おもだかの瓦が発見されています。

この毛利秀包の妻は大友宗麟の娘（洗礼名マセンシア）だった関係で城下町に二つのキリスト教会が建てられたとエズス会報に記載されています。また毛利秀包自身もキリシタン大名であったと言われています。

上の写真（三四―二）は十字紋瓦です。瓦の中央よりやや右に十字の模様が見られます。

長崎の勝山町遺跡からは、花十字の瓦

やキリシタン瓦と呼ばれていた十字紋瓦が出土していま
す。



花十字瓦



十字紋瓦

38-1

長崎の勝山町遺跡のサンドミンゴ教会や原城址からも
花十字瓦が出ています。熊本山都町の矢部城跡からはキ
リシタン瓦と呼ばれていた十文字瓦が、福岡県朝倉市の
秋月城址からは罪標付十字架紋軒丸瓦が見つかっていま
す。

四、キリシタン祈りの道具

十六〜十七世紀のキリスト教布教期に使われていた、

祈りの道具は、各地のキリシタン遺跡から出土していま
す。その中には、メダイやコンタツと呼ばれていたロサ
リオや十字架、指輪などがあります。

昭和四十年（一九六五）、大分市の丹生台地の小原地
区の畑から備前焼の壺が発見され、その壺の中からキリ
シタン遺物が多数発見されました。

その中には、木彫の聖母子像一点、黒檀製の十字架のキ
リスト、木製のロザリオ三点、真鍮製十字架なども発見
されました。これらに使われている真鍮は天正十八年
（一五九〇）以降に多くみられるようになっていきます。銅・
錫に代わるものとして外国からの輸入されたものと考え
られています。



（長崎で発見されたロザリオ）